仙台市市民活動サポートセンター通信

■ぱれっと まだ＊これ合併号は、市内の公共施設、県内外のNPO支援センターなどに送付しています。

ぱれっと まだ＊これ 合併号

2012 2月 No.150

●目次

P2～3　仙台で暮らす外国人への支援
P4　事務用ブース入居団体による震災復興支援活動～その5～
P5　速報　復興支援活動報告会
P6　市民活動サポートセンターからのお知らせ

ともに、前へ！仙台

東日本大震災　特別号⑪

2月4日(土)に、復興支援活動報告会「つながることがまちのチカラになる　3.11からの支援のかたち」を開催しました。NPO、地域、企業、学生など、さまざまなセクターが連携して支援活動を行ってきた事例の紹介と、地域の課題を解決するための協働のあり方についてのパネルディスカッションを行いました。

当日は、定員を超える参加があり、参加者からは「実践的な事例について話を聞くことができ、活動の参考になった」「他団体・他セクターとつながるヒントが得られた」といった声が寄せられました。

▲パネルディスカッションでは「震災後NPOと一緒に活動し可能性が広がった」という話も出ました。

東日本大震災
～その時～

仙台で暮らす外国人への支援

財団法人仙台国際交流協会

財団法人仙台国際交流協会（以下、SIRA）は、3月11日の震災直後から、災害情報や支援情報が届きにくい外国籍市民のために、青葉山にある仙台国際センターをはじめ、FMラジオ等を使い、職員・ボランティア総出で情報提供と支援活動を開始しました。
今回は、企画事業課企画係係長の須藤伸子さんから、支援活動の様子や災害に対する取り組みについてお話を伺いました。

●流動的な在仙の外国籍市民

財団法人仙台国際交流協会（以下、SIRA）は、仙台に住む外国籍や外国に由来のある市民がより快適に暮らし、また仙台に住む人が多様な文化に触れることができる機会をつくるために1990年に設立されました。
仙台市内にはおおよそ1万人の外国籍市民がいますが、その4割近くが学業や研究のために来日しています。そのため、日本や仙台に一時的に在住しているという方が多く、日本の生活になじむ前に帰国される方が多いことが特徴になっています。
SIRAでは、2000年から「災害時言語ボランティア制度」を設けて、災害が起こった際に、日本語が不自由な外国籍市民に対して言語面でのサポートや、避難所での災害情報の通訳・翻訳を行うための体制を整えてきました。
また2005年からは、FM放送局の番組内で防災アドバイスを流すなど、様々な手段で、在仙外国籍市民に対する災害時の支援を講じてきました。

●3.11　外国籍市民に何がおこったのか?

3月11日、様々なライフラインが停止し、多くの人々が影響を受けました。外国籍市民の方々も情報が得られず、また来日されたばかりの方などは地震の経験もなくパニックになったそうです。
そんな中、留学生をはじめ国際センターに集まったボランティアの方々は、自ら被災しているにも関わらず、在仙外国籍市民からの問い合わせに応じるだけではなく、各国の大使館や領事館からの安否確認や帰国指示、マスコミからの取材などにも対応しました。

▲　災害時言語ボランティアのみなさん
震災時、避難所などで言語面でサポートしました。

日頃から、災害には備えをしていたSIRAでしたが、今回の災害の規模は想像を超えたものでした。多言語による情報提供と相談対応を行う災害多言語支援センターを震災当日に立ち上げたものの、停電のため、情報の収集・提供は非常に困難を極めたそうです。その中で、職員とボランティアで避難所などを可能な限り回り、言葉も通じず、情報も入りづらい外国籍市民に支援情報を伝え続けました。
災害多言語支援センターは４月末で役割を終え、同時に、SIRAは、新たに仙台市民になる外国籍市民の方々の支援を開始しました。

●外国籍市民の抱える問題

被災により様々な環境に置かれた多くの外国籍市民の方々にとって、震災発生から１年が経とうとしている中、まだ残されている課題は、日常的な情報の入手です。

特に、海外からの情報を得ている方々は、原発・放射線関連の情報が日本国内の報道と違うため、日本人以上に日々不安を覚えているということです。

●多文化共生のまちは災害に強いまち

今回の災害の経験から、SIRAでは、「日常的に外国籍市民がよりコミュニケーションをとりやすい地域づくりが大切だ」ということを痛感しているそうです。地域の中には「外国の言葉が分からないので、話しかけられない」とおっしゃる方もおられると思いますが、「多くの在仙外国籍市民は日本語や日本文化に触れる機会を求めているので、ぜひ日本語で日常的に話しかけてみてください」と、須藤さんはお話ししてくださいました。

SIRAでは、アジア諸国を中心に世界の様々な地域から来仙している外国籍市民の文化に気軽に触れられる「Cafeぐろーかる」や季節ごとの日本文化体験イベントも、定期的に開催しています。

「他国の文化に触れてみたい、ちょっとだけ興味があると言う日本人の方もぜひ参加してください」と須藤さん。

国籍の違う多様な文化背景の人々が日常から交流することで、災害時の助け合い、地域のより強いきずなが生まれます。　（藤原　航）

▲ 8月3日(水)に開催された「Cafeぐろーかる」「モンゴル」をテーマに、モンゴル出身の仙台在住の方と、元青年海外協力隊員としてモンゴルで活動してきた日本の方をゲストにお茶(モンゴルティ)を片手にわいわいお話しました。

注）本記事では、外国籍を持つ仙台市内在住者、及び外国に由来のある市民の事を在仙外国籍市民と表示しています。

●連絡先

財団法人仙台国際交流協会(通称：SIRA)
【代表者】 理事長　稲葉信義
【連絡先】 〒980-0856 仙台市青葉区青葉山
仙台国際センター内
TEL：022-265-2211　FAX：022-265-2485
【E-mail】 info@sira.or.jp
【HP】 http://www.sira.or.jp

▲エフエムたいはく(太白)でのラジオ収録風景

■SIRA（サイラ）多言語放送局

SIRA多言語放送局では、仙台に住む外国籍市民の方々と協力して、多言語による生活情報や季節の話題などを放送しています。防災情報もお届けしています。

◆エフエムたいはく(78.9MHz)
毎週火曜日　17:30～18:45
ポルトガル語、韓国語、中国語、英語

◆fmいずみ(79.7MHz)
毎週月曜日　14:00～14:15
モンゴル語、英語、タガログ語、中国語

■事務用ブース入居団体による震災復興支援活動 ～その5～

サポセン7階の事務用ブース入居団体による様々な震災復興活動をご紹介します。

仙台グリーフケア研究会　つながりを信じて

2012年1月からサポセンの事務用ブースに入居している「仙台グリーフケア研究会」（以下、グリーフケア研究会）は、2005年の設立以降、グリーフケア活動、自死予防の取り組みを行ってきました。

今回は1月27日に行われた事務用ブース入居団体の情報交換会に伺い、代表の滑川明男さんと事務局担当の佐野由季さんにお話をお聞きしました。

●安心して話すことのできる場を

グリーフとは「悲嘆」という意味で、大切な方を亡くし大きな悲しみに襲われている方に対するサポートのことを「グリーフケア」と言います。

グリーフケア研究会は、仙台市立病院内のボランティアグループから発展した団体です。2000年1月から、亡くなった患者さんのご遺族に相談窓口案内のパンフレットを送付する活動を行っていました。自死に関するシンポジウムを開催するにあたり、より広い活動をするため、2005年にグリーフケア研究会を設立。医師・看護師・ソーシャルワーカー等の病院スタッフだけでなく大学教員・学生・産業カウンセラー等もメンバーに加わりました。現在会員は数十人、実際に活動に参加するメンバーは大体20人ほどとのことです。

グリーフケアを普及するため、シンポジウムの他に「わかちあいの会」を開催してきました。大切な人を亡くしたという辛い感情を、同じ立場の人と話し合い、自分の心を見つめなおす場が「わかちあいの会」です。

●使命を果たすために

多くの尊い命が奪われてしまった東日本大震災。心にダメージを受けた方が大勢いらっしゃる現状から、グリーフケア研究会ではまず3月19日より「こころの相談ホットライン」を開設しました。

5月からは「わかちあいの会」を再開。震災前は仙台にて隔月で行っていたのを、仙台・南三陸・石巻で毎月、気仙沼で隔月開催するなど、活動地域や回数を増やしてサポート体制を整えています。わかちあいの会と同時に、あしなが育英会と協力して子どものグリーフサポートも毎月開催しています。

「わかちあいの会は、自分の意思で参加し、喪失体験に向き合います。普段言えない苦しさや悲しさを言える場を作ることを大事にしています」と滑川さんはおっしゃっていました。

また、活動の拡充に合わせて、わかちあいの会を運営するファシリテーター養成講座も回数を増やして開催し、人材育成に努めています。

●続けることで生まれるもの

佐野さんに活動の中で印象に残っていることを伺うと、「わかちあいの会に繰り返し参加している方から、“また来月行こう”と思って苦しい時を乗り越えているとお聞きした時は、“続けることに意味がある、やっていて良かった”と思いました」と話してくださいました。

石巻で行ったわかちあいの会の中で「ぜひ石巻で講演会を開催して欲しい」という声があがり、2月19日には「講演会in石巻　悲しみの向こうに見えるもの―希望の芽生え」を開催します。寄り添い続けているからこそ信頼が生まれ、このような声があがったのだと思います。

サポセンの事務用ブースを利用しての活動が、さらに多くの方とつながるきっかけになればと思います。

（菅野　祥子）

▲2/19の講演会のチラシ

～こころの相談ホットライン～

震災後不安を抱いている方、辛い思いをされている方、大切な人を亡くした方、子どもたちの心の傷等、思いのたけをお伝えください。その思いを何とか受け止めたいと思います。お待ちしております。

TEL：080-3326-5612
FAX：022-369-8012
E-mail：saigaikokorocare@gmail.com

仙台グリーフケア研究会
【代表者】 滑川　明男
【連絡先】 TEL　070-5548-2186（事務局）
【E-mail】 griefoffice@gmail.com
【HP】 http://www.sendai-griefcare.org/

速報 復興支援活動報告会 つながることがまちのチカラになる 3.11からの支援のかたち

2月4日(土)、仙台市市民活動サポートセンターにおいて、3月11日の東日本大震災発生後、NPO・NGO、企業、行政などがそれぞれの地域で行ってきた復興支援活動を振り返る報告会が開催され、当日は、120人にのぼる市民の方々にお集まりいただきました。報告会ではキーワードとなった「つながること」をもとに、ゲストの方々に活動事例を報告していただいた後、パネルディスカッションでも、多様な「支援のかたち」とその復興支援活動の様子をお話いただきました。

■同じ課題に向き合う全国ネットワークの力
「一般社団法人共生地域創造財団」
事務局長 蔵島一匡さん

震災後、いち早く被災地で炊き出しや物資配布などの緊急支援を開始できたのは、被災地の活動団体と既存の全国ネットワーク団体が、震災前からホームレス支援など同じ課題に向き合うことで「つながり」ができていたからだといいます。各団体がそれぞれのバックグランドや強みを活かし、支援分野の割り振りや被災地で活動する団体への後方支援体制がうまく機能したことで、迅速に被災地へ物資を届け、人員を派遣することができました。行政でしかできないこと、民間でしかできないことをお互い認識して「つながること」で、協働の可能性が広がっていきます。一方的な支援でない、当事者の側に立った伴走していく支援が大切なのです。

■被災地域・地縁組織とNPOの出会い
「がんばっぺ岡田の会」代表 伊藤正敏さん

伊藤さんは、被災地である宮城野区岡田地区の住民です。震災後、岡田地区で生まれ育ってきた青年有志が中心となり、自分たちの力で地域を盛り上げ復興していこうと「がんばっぺ岡田の会」の活動を開始しました。甚大な津波の被害を受け「バラバラになった地区をひとつに！」という想いをこめて開催した「夏祭り」には、1,500人の観客が集まり住民の方々は、久しぶりの再会を喜び合ったといいます。そのイベントの成功のカギは、NPOと「つながること」でした。今まで出会う機会がなかったNPOとの連携が何倍ものチカラを発揮し、震災後の地域をつなぐ原動力となりました。

■多様なつながりを、新たな地域の力へ
「六郷・七郷コミネット」副会長 堀川邦雄さん

若林区の六郷・七郷地区は、震災と津波により壊滅的な被害を受けました。このような状況の中、地域住民、NPO、大学、市民センター、社会福祉協議会、行政などが「つながること」で、「六郷・七郷コミネット」が結成されました。ニッペリア仮設住宅集会所等で「おちゃっこ飲み会」やその他様々な催しを実施しながら、被災地の現場で起きていることを把握し、住民への押し付けでない支援を心がけてきたといいます。その中で、みなさんの興味関心は、健康維持、食文化に関すること、そして土に触れたいという思いでした。今後も住民の声を聞きながら、自立に向けた生活再建とコミュニティーの再生へとつなげていく支援が求められていきます。

■学生の機動力を生かす企業の力
「情報ボランティア＠仙台」代表 岩崎真美さん
「河北新報メディア局ネット事業部」
部長 八浪英明さん

震災後、何かをしたいと思っていた学生たちに、河北新報社が運営するSNSサイト「ふらっと」で、情報発信をしてみないかと持ちかけたことから、学生たちと企業の「つながること」が始まりました。市内の大学生を中心に、被災地での情報収集から記事の執筆までをこなし、震災後から11ヶ月でブログに発信した数は401本。その他、あすと長町仮設住宅での情報紙の発行や11月からは、仙台市が発行する震災復興地域かわら版「みらいん」の１頁分の原稿執筆を担当するなど活動の幅が広がっています。情報を伝えるという活動を通して、取材先の人や団体とつながることができたことも、学生にとっては貴重な体験であり、学びの場となりました。

■地域の課題を解決する協働

コーディネーターに紅邑晶子（（特活）せんだい・みやぎNPOセンター代表理事）が加わり、活動を行ってきて気づいたことや見えてきた課題等をお話していただきました。

ゲストからは、「震災後NPOと一緒に活動し可能性が広がった」「今後も地域の問題を解決するため支援活動を行っていきたい」という発言が続きました。

今回の震災においてNPOは、企業や行政、国内外で活動する様々な人や団体から、「つながること」を求められたのが印象的です。それは、NPOの社会的責任、活動の専門性も問われていることにもなりますが、 団体同士のネットワーク、セクターを越えた連携がこれからの地域づくりや復興の力になっていくのだと感じました。　　（葛西　淳子）

市民活動サポートセンターからのお知らせ

●助成金相談会（報告編）

内容：助成を受けて活動した場合、事業終了後の報告書提出は必須です。活動の成果を伝える報告の仕方について、助成財団から講師を招きレクチャーします。個別相談にも応じます。
日時：2012年3月15日（木）午後7時～
会場：仙台市市民活動サポートセンター　研修室５
参加費：無料（要事前申込）
申込方法：電話・FAX・窓口にて事前にお申込ください。
TEL：022-212-3010
FAX：022-268-4042

●出前相談

内容：多様な震災復興支援活動を行う市民活動団体・NPOについて、多くの市民、被災者に知っていただくため、「出前サポセン」を実施しています。また、市民活動サポートセンターとシニア活動支援センターでは、「ボランティアに参加してみたい、地域に貢献したい」という思いを応援しています。ぜひお気軽にお立ち寄りください。
日時：2012年3月17日（土）午後2時～午後5時
会場：市民図書館

シニア活動支援センターからのお知らせ

●お役に立ちたいあなたのためのシニアサロン

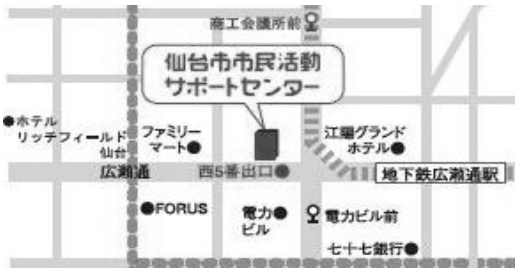
得意なこと・好きなことで地域貢献してみませんか！

内容：趣味のマジックを活かし地域貢献活動をしているゲストをお招きし、活動を始めたきっかけや活動内容をお話いただきます。
日時：2012年3月3日（土）午後2時～午後5時
会場：仙台市市民活動サポートセンター　研修室５
参加費：500円
定員：20名（要事前申込・先着順）
申込方法：電話・FAX・窓口にて事前にお申込ください。
TEL：022-217-3983
FAX：022-217-3984

■ 仙台市市民活動サポートセンターとは

さまざまな分野の市民活動団体やNPO、ボランティアなど、非営利で公益的な活動をしている人たちや、これから活動しようと考えている人たちのための拠点施設です。

■ 案内図



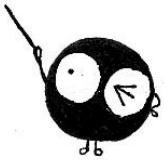
○当施設に駐車場・駐輪場はございません。お車や自転車で来館される方は、周辺有料駐車場・駐輪場をご利用ください。
注）路上駐車・駐輪は、周辺の迷惑となりますのでおやめください。
○ご来館の際は、公共交通機関をご利用ください。
［最寄のバス停］電力ビル前、商工会議所前
［地下鉄］広瀬通駅下車、西5番出口すぐ

■ 開館時間

○平日／午前9時～午後10時
○日祝／ 午前9時～午後6時

2月の休館日

第2水曜日 2/8
第4水曜日 2/22



■シニア活動支援センターとは

シニア活動支援センターは、シニア世代の地域・社会参加活動を応援しています。お気軽にお問合わせください。

○開館時間　平日／午前10時～午後8時
　　日祝／午前10時～午後6時

○休館日　毎週水曜日

■ 編集後記

東日本大震災では、大切な方を亡くされた方々がとても多くいらっしゃいます。遺族の皆さんのわかちあいの場をつくってきた「仙台グリーフケア研究会」がサポセンの事務ブースに入居されました。遺族の皆さんに寄り添う活動を、サポセンも事務用ブースを通じて支えていきたいと思います。（スタッフ一同）

発　行：仙台市市民活動サポートセンター
〒980-0811　仙台市青葉区一番町四丁目1-3
TEL:022-212-3010　FAX:022-268-4042
ホームページ　http://www.sapo-sen.jp
発 行 日：2012年2月11日
編　　集：特定非営利活動法人 せんだい・みやぎNPOセンター
編 集 人：小松州子　菅野祥子　太田貴　葛西淳子

●復興支援活動情報ブログ
http://blog.canpan.info/fukkou/

仙台市市民活動サポートセンターは、特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンターが仙台市の指定管理者として、管理運営を行なっています。［指定管理期間：2010年4月1日～2015年3月31日］

★古紙再生紙を使用★大豆油インキを使用